



18世紀後半はヨーロッパ全域に革命的変化が起こった時期だった。啓蒙主義は科学の進歩を促して産業革命をもたらし、それとともにさまざまな哲学思想を生み出して、そうした思想が北アメリカとフランスでの政治における大変革を引き起こした。産業化と都市化の進展が社会に及ぼした数々の影響は、多くの人々の生活様式と就労形態に重大な衝撃を与えた。

ルネサンスと啓蒙主義の時代には、人間と理性は切り離されずに一対となっていたが、19世紀前半には個人が前面に現れる。合理性に対する反動もあって、芸術の世界でひとつの運動が起こり、主観的な感性や心的能力が重視された。これがロマン主義の名で知られるようになった。

ロマン主義文学

ロマン主義の起源はシュトゥルム・ウント・ドラング運動にあり、ドイツで興ったこの運動からはゲーテとシラーという作家が現れた。啓蒙主義の古典様式から19世紀のロマン主義へのこの過渡期に、ゲーテとシラーは慣例にとらわれない主人公を登場させ、その行動よりも思考や感情に重きを置いた。「ロマン主義のヒーロー」と呼ばれるこうした人物像は、その時代の反抗心を典型的に示すものとなり、そのころ数を増しつつあった小説のなかに繰り返し登場した。19世紀半ばまでにロマン主義がヨーロッパ全域からロシアへ広まると、プーシキン、レールモンツ、トゥルゲーネフなどの作家は、この観念を発展させて「余計者」と

いう人物像を作り出し、型破りな考え方ゆえに社会から完全に孤立する主人公を登場させた。

ロマン主義文学のもうひとつの特徴は、自然界との親近性である。ワーズワースやコールリッジなどのイギリスの詩人が、産業化時代への対抗手段として自然の美と力を描き、幼少期の無垢と衝動を賛美した。都市化に対する似たような反動はアメリカの超絶主義作家の作品に顕著であり、エマソンやソローやホイットマンが博愛主義的な自由の精神を喚起して、自分たちの流儀で「自然に帰れ」という呼びかけをするに至った。

ゴシック小説

だがロマン主義作家の多くが気づいた

のは、自然が掻き立てる感情には喜びとともに恐怖もありうることだった。自然の破壊力に、そして超自然にさえも魅せられるこうした心情が、ゴシック文学として知られるジャンルを生み出した。その流れはドイツで定まり、ゲーテの戯曲『ファウスト』やホフマンの短編物語がその役割を果たしたが、最も熱心にこのジャンルを取り入れたのはイギリスの小説家たちであり、『フランケンシュタイン』を書いたメアリー・シェリーなどの例がある。ヴィクトリア朝の小説の多くにはゴシックの要素がちりばめられていて、エミリー・ブロンテの『嵐が丘』にあるように、荒涼たる風景のなかで、主人公が具えた奔放な性質を強調する例がしばしば見られた。また、都会の陰惨な環境

に身を置く異様な人物を描く例も多く、これはディケンズの作品に特徴的に見てとれる。このジャンルはアメリカでも広まり、死をさまざまに描いたポーの物語がその例だった。また、表現様式にも影響を与え、メルヴィルは『白鯨』などの作品にそれを取り入れた。

歴史と自己認識

社会が産業化するにつれて読み書き能力の水準があがり、文学はもはや教育を受けた者の独占物ではなくなった。特に小説は19世紀のヨーロッパとアメリカで読者数が一気に増え、多くの作品が連続物の形式で刊行された。人気があったのは、スコット、デュマ、クーパーなどの作家が書いた歴史小説で、こうした作品

は派手な冒険物語を求める声に応えたものだったが、トルストイの『戦争と平和』のように、もっと深刻な内容の作品もあった。民話やおとぎ話も好まれたが、ある文化に特有のものであることが多かった。このため、地域特有の伝統に関心が集まり、当時強まってきた民族主義と同調した。

読者層のひろがりや識字率の向上によって、作者の顔ぶれは非常に多彩になった。その最も目につく例が多くの女性作家であり、イギリスのブロンテ姉妹やジョージ・エリオットらが文学に女性の視点を取りこむ先駆者となった。また、ダグラスやジェイコブズやノーザップなど、早い時期に自由の身になった元奴隷が、アメリカの抑圧された黒人に声を与えた。■